

2. 東京都私立高校入試の動向

「2019年度 都内私立高入試の概況」

新教育研究協会 原 栄久 氏

2019年度 都内私立高入試の概況

前年度の2018年度入試から私立志向が高まり、都立高入試では倍率が大幅にダウンし、約30校440人の募集数で第三次募集を実施するという前代未聞の入試になりました。その結果、表1にあるように都立高への進学率が下がって私立高が上がり、都立高への進学率はこの10年間でもっとも低く、私立高は逆に最も高くなりました。さらに通信制高校の進学率も都立定時制と肩を並べるまでになり、中学校卒業後の進路として定着してきているところも注目されました。

表1. 都内公立私立通信制高校の進学率の推移

	2018	2017	2016	2015	2014	2013	2012	2011	2010	2009
都立	53.0	53.6	53.6	53.8	54.0	54.5	54.2	53.7	54.1	54.7
私立	32.5	31.7	32.3	31.9	31.7	30.6	30.5	30.6	30.5	30.7
都立定時	3.0	3.7	3.6	3.9	4.1	4.5	4.7	4.8	4.8	4.7
通信	3.0	2.8	2.3	1.8	1.5	1.5	1.5	1.6	1.4	1.2

※「公立学校統計調査 進路状況調査編」より。年度は高校入試年度にしています。

そして私立志向2年目の2019年度入試ではさらに都立高の倍率がダウン、約20校420人の募集数で第三次募集を実施しました。この年の進学実績はまだ公表されていませんが、さらに私立高、通信制高校への進学率が上がることは間違いないでしょう。

このように私立志向が高まっている背景にはいくつかの要因があります。ひとつが東京都の私立高校に対する授業料助成金制度の拡充です。世帯の年収が760万円までの場合、授業料がほぼ無償化されています。もうひとつが大学入試改革の「大学入学共通テスト」です。新しいテストに対する不安感から私立大学附属校への流れが生じています。さらに首都圏の大学の定員厳格化によって高校卒業後の合格実績が伸び悩む中で、私立高の特進コースや選抜コースなど大学進学に特化したコースの人气が上がっています。

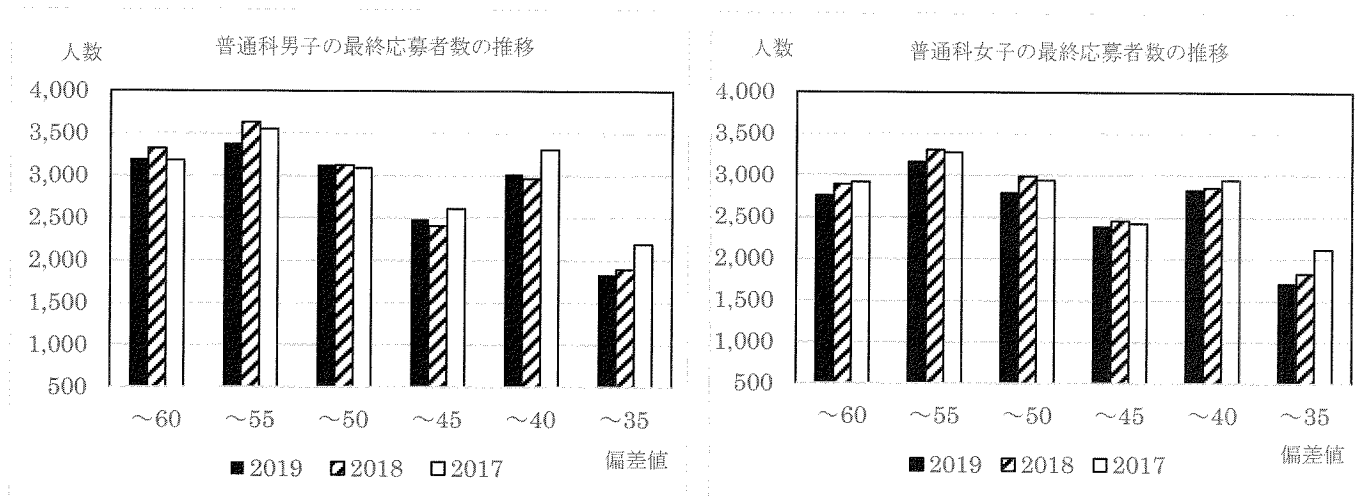
私立志向が高まる中で、今年度の都内私立高入試がどのように行われたのか見ていきましょう。

1. 都立高普通科と私立高の応募状況の比較

次の表2は都立高校の男女別普通科の応募者数を学力レベル別で集計したものです。これを見ると、前年度の2018年度入試では、男子は偏差値45, 40, 35, 女子は40と35の層で応募者の減少し、これらの学力層が私立志向の影響を受けました。それが今年度の2019年度入試になると、男子は60, 55, 50の中堅上位層で、女子はほぼすべての学力層で応募減になっていますが、男子同様60, 55, 50の層での減少が目立ち私立志向の影響が上位層に移りました。

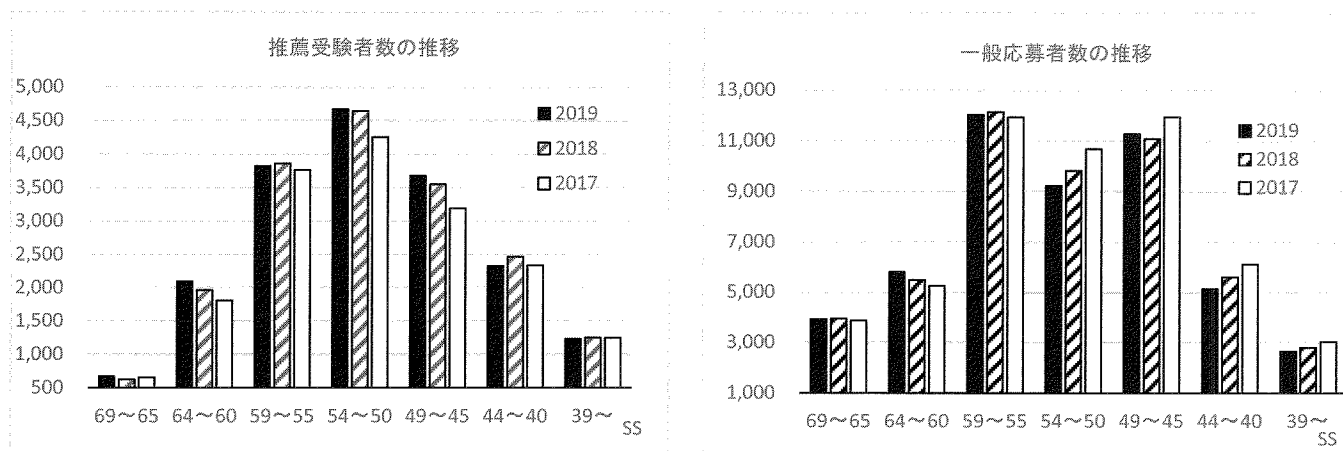
一方で私立高校の応募状況はどのような傾向がみられるのでしょうか。表3は私立高校の推薦受験者数と一般応募者数を表2と同じように学力別に集計したものです。

表 2. 都立高学力別最終応募者数の推移



まず、推薦入試の方を見ると多くの学力層で応募者は増加傾向になっています。私立志向の高まりにより私立高第一志望の生徒が増えていることを示しています。39～の層で増えていないのは通信制に向かったためと思われます。一方で一般入試の応募状況を見ると、55以上の学力層では増加傾向がみられるものの、54～50以下の学力層になると応募者が減少傾向に転じます。このように中堅上位層と中堅下位層で異なる動きになっているのも私立志向の高まりによる結果と考えられます。つまり、受験生が私立志向によって推薦入試に移動すれば一般入試の応募者は減ることになりますが、学力上位校の推薦入試は不合格者が発生し、その不合格者の多くが同じ高校に再受験すること、また近年、私立高同士の併願により、他の私立高を抑えにして上位校に挑戦する受験生が増えていること、そして今見たように都立高で減少した中堅上位層が私立に移動していることなどの理由からです。今後も私立志向が高まるにつれて似たような応募状況になると予想されます。

表 3. 都内私立高推薦受験者と一般応募者の推移 (新教育調べ)



※新教育のアンケート調査による集計です。アンケート締め切り時点で数校分の入試結果が入っていません。

2. 私立難関男子校、女子校の入試状況

次からは、各校の入試状況を見ていきます。最初に男子、女子難関校の状況です。表4は一般入試の応募者数を過去6年分掲載しました。

表4. 私立難関男子・女子進学校の一般応募者数の推移

学校名	2019	2018	2017	2016	2015	2014
開成	537	537	531	645	656	616
桐朋	256	262	248	321	361	314
城北	328	316	330	323	675	712
巣鴨	118	108	78	98	96	127
本郷	304	290	300	319	325	227
豊島岡女子学園	420	474	414	535	663	605
計	1,963	1,987	1,901	2,241	2,776	2,601

開成の応募者数は前年度と変わっていません。しかし2016年度以前は600人を超えていたので同校としては少ない応募者数で推移しているといえます。しかも合格者数は例年通りだしているため、実質倍率は3倍前後とこちらも同校としては低めの競争率が続いています。桐朋も2016年度以前は300人を超える応募者を集めていたので、この250人前後というのは少ない方で、実質倍率も1倍台前半が続いています。城北も同様で、推薦入試を実施した2016年度から一般入試の応募者が減少し、以降300人程度で推移しています。実質倍率もそれまでの2倍前後から1.4倍台まで緩和されました。巣鴨は2017年度に応募者数が70人台まで落ち込み、実質倍率が1.1倍台まで下がりましたが、それ以降、応募者数は増加傾向で、実質倍率も1.40→1.48倍と上がっています。一方、本郷は毎年300人程度の応募者を集め、実質倍率も2倍台で比較的安定した入試が続きます。

豊島岡女子学園は2017年度より応募者が500人に届かなくなりました。ただ、合格者をそれに合わせて絞っているため、実質倍率は2014年度より2.34→2.12→2.16→1.92→2.08→2.02倍とやや下降傾向が窺えますが、比較的安定しているといえます。

このように、これら私立男子・女子の難関進学校は一部を除き以前のような激戦になることがなくなりました。これは都立の進学指導重点校などが進学実績を伸ばしてきていることに加え、他の私立高校が特進コース、選抜コースなどハイレベルのコースを設置し、競合する学校が増えてきていること、それに受験生の共学志向が影響していると思います。

3. 大学附属校の入試状況

では大学附属校の応募状況はどのように推移しているのでしょうか。表5は早慶GMARCHの附属校の推薦受験者と一般応募者の推移を過去4年間分掲載しました。

これを見ると、ここ1,2年で応募者が増加していることがわかり、附属校人気を証明するような動きになっています。青山学院は一般入試の応募者は前年度より減少したものの、推薦入試は増加、一般入試から推薦にシフトしたような形になりました。第一志望者が増加したことを窺わせます。

中央大学杉並、中央大学附属、中央大学はいずれも推薦、一般入試ともに増加、特に中央大学附属は

推薦で 120 人 39.6%，一般入試は 188 人 27.6%とそれぞれ大幅に増加しました。2018 年度に SSH の指定を受けたこと，国公立大学や中央大学にない学部を受験する場合は推薦権を保持できるというしくみ，さらに広報活動にも熱心なことが大幅増につながったのかもしれませんが。早稲田実業は男子の一般応募者が 538 人から 691 人へと 153 人 28.4%の増となりました。前年度は 122 人 18.5%減ったのでその反動もありますが，私立大学附属校の人気も後押ししているようです。一方で明治大学付属明治はほぼ前年度並みの応募者数でした。これは推薦，一般入試ともに前年度の実質倍率が高騰（推薦 2.06→2.79 倍，一般 2.52→3.36 倍）したことが影響したと思われます。国際基督教大学は入試日を 2/10 から 2/11 に移動したため 65 人 18.5%の増，応募者数が 400 人を超えたのは 6 年ぶりのことです。

早稲田高等学院は応募者増にはなりませんでしたが，推薦，一般入試ともに安定した入試を行っています。学習院は変動が激しく応募者数は増減が続きます。実質倍率も 2016 年度より 3.06→2.19→5.33→4.24 倍と隔年現象的な動きで推移しています。募集数が少ない（20 人）ため，多少の応募者と合格者の増減で倍率変動します。慶應義塾女子は高倍率で激戦の入試状況になっています。一般入試の実質倍率は 2016 年度より 3.18→3.18→3.36→3.73 倍と上昇傾向で，女子校希望者の学力上位者がここに集中しているような形です。

表 5. 私立難関大学附属校の状況

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2019	2018	2017	2016	2019	2018	2017	2016
青山学院	228	189	186	192	909	974	853	815
中央大学杉並	324	268	251	263	974	851	799	835
中央大学附属	423	303	231	235	868	680	569	691
中央大学	202	170	189	168	692	675	596	642
早稲田実業	154	139	127	134	1,080	994	1,097	1,374
明治大学付属明治	116	131	99	105	779	786	811	575
国際基督教大学	—	—	—	—	416	351	347	343
早稲田高等学院	249	255	304	132	1,841	1,913	1,747	1,793
学習院	—	—	—	—	113	157	132	127
慶應義塾女子	119	109	104	120	490	467	427	488
計	1,815	1,564	1,491	1,349	8,162	7,848	7,378	7,683

次の表 6 も都内の上位大学附属校の状況ですが，ここでは推薦受験者数は増加傾向にあるものの，一般入試の応募者は減少しているところもでてきて，9 校合わせた応募者数は前年度より 334 人 4.6%とわずかですが減少しました。

明治大学付属中野八王子は一般入試で 134 人 23.0%の減でした。先にみた国際基督教大学の入試日が 2/11 に移動し同じ日になったことと，前年度に推薦合格者が増加し一般入試の合格者を絞って（99→77 人）実質倍率が 4.19 倍から 7.32 倍へと大幅にアップしたことで敬遠されたようです。ただ，応募者が減ったといっても実質倍率は 5.52 倍に下がっただけで激戦状況は変わりませんでした。法政大学も一般入試の応募者が 56 人 12.2%の減，これも 2018 年度の一般入試の実質倍率が 2.64 倍から 3.86 倍へとアップし近年にない激戦になったことが原因と思われます。しかし，今年度は合格者を絞った

(112→81 人) ため実質倍率は 4.52 倍とさらに厳しい入試になりました。今年度に初めて推薦入試を導入した成蹊は、推薦の募集数 10 人に対して応募者は 11 人でした。一般入試の募集数はこれまでと同じ 70 人でしたが応募者は前年度より 40 人 16.9%の減、200 人を割ったのは最近の 10 年間で初めてです。

表 6. 上位大学附属校の状況

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2019	2018	2017	2016	2019	2018	2017	2016
明治大学付属中野八王子	372	381	299	296	449	583	430	505
法政大学	134	141	84	97	402	458	344	341
成蹊	11	—	—	—	197	237	232	231
明治学院 (推薦は応募数)	286	246	285	234	1,027	1,001	1,143	847
國學院	311	228	163	162	2,702	2,888	2,747	1,514
國學院久我山	39	39	61	57	305	338	428	387
帝京大学	—	—	—	—	517	497	557	488
東京都市大学等々力	—	—	—	—	209	170	195	242
明治大学付属中野	20	25	23	26	1,056	1,026	1,006	861
計	1,173	1,060	915	872	6,864	7,198	7,082	5,416

明治学院の推薦入試は応募後に書類選考があり受験者が絞られるので、この表では応募者数を掲載しています。推薦応募者数は増えたり減ったりしており、今年度の応募増は私立志向の影響とは必ずしも言えないかもしれません。一般入試は 2 回の入試の内 1 回目を 2/10 から 2/11 に移動、その影響で応募者は約 100 人増加しましたが、2 回目の 2/21 が約 80 人減となってトータルでは前年度とほぼ同じ応募者数になっています。國學院は推薦入試が増加傾向で第一志望者が増えていることを示しています。一般入試は 3 回の入試機会があり (2017 年度から) それぞれ大規模入試になります。2 回目、3 回目と後になるほど実質倍率は上がっており、今年度は 1 回目が前年度の 2.46 倍から 2.37 倍とあまり変わらなかったものの、2 回目 4.72→5.04 倍、3 回目 7.27→7.78 倍とアップし厳しい状況になっています。

國學院久我山は応募者が減少傾向です。推薦入試は 2 年連続で募集人員 (50 人) を満たすことはできませんでした。一般入試の 305 人は最近の 10 年間でもっとも少ない応募者数です。あらかじめ文系・理系を決めて出願するのは難しいのかもしれませんが。帝京大学と東京都市大学等々力は安定した入試が続いています。この両校は附属大学に進学する生徒はほとんどいないので進学校ともいえますが、国立大学や難関大学への合格実績が評価されているようです。明治大学付属中野も大きな変動はなく、一般入試の実質倍率は 4 年連続 3 倍台で厳しい入試になっています。

次に日本大学系の高校の状況を見ていきましょう。

今年度、注目された日大系の高校ですが、表 7 を見てもわかるように、一般入試では 7 校合わせた応募者数が 400 人 16.3%の減になりました。推薦入試の受験者も前年度と比較すると 267 人 17.9%の減ですが、こちらは前々年度の数に戻った形です。一連の出来事の影響を受けたものの、中には応募増となったところもあり日大系がすべて敬遠されたとはいえないようです。

日本大学第一は推薦で24人16.2%、一般入試では105人36.0%と一般入試で大幅に減少しました。推薦入試の減少分24人のうち23人が女子ですが、同じ推薦基準の目黒日本大学に移動したのかもしれませんが。また一般入試は前年度に実質倍率が1.71倍から2.91倍に大幅にアップしており、それが今年度の応募減の要因になっていると思われます。その減少分の7割弱は併願者のため、こちらも併願優遇制度を設けている目黒日本大学や東海大浦安などに移動したのではないのでしょうか。日本大学第二は推薦入試で60人43.2%、一般入試は152人34.6%と大幅に減少しました。推薦入試の受験者が募集人員(90人)に達しなかったのと一般入試の応募者が300人以下になったのは最近の5年間ではありません。ここは日本大学への進学率が約3割と少ないことから、大学附属校としての魅力が他の附属校よりやや弱いのかもかもしれません。推薦基準に近い専修大学附属や杉並学院「特進」などに移動したと思われます。日本大学第三は推薦入試で9人11.0%の微減、一般入試は35人18.9%の減となりましたが、いずれも前々年度よりは多い人数を集めています。一般入試は前年度に不合格者が多く出た(実質倍率1.15→1.45倍)ことからその反動による減少ともいえます。日本大学櫻丘は推薦入試が30人11.3%の減ですが、これは推薦基準から9科の選択肢を廃止したためです。一般入試の方は特別進学の特選基準を設定した影響なのかむしろ応募者は59人13.8%増えています。日本大学鶴ヶ丘も推薦入試は26人10.3%の減。一般入試は49人8.4%減で留まり、前々年度より100人以上多い数を保っています。応募者数は増えたり減ったりしており隔年的な動きといえるでしょう。日本大学豊山は推薦で62人19.1%、一般92人21.2%減りましたが、日大離れによるものというより新校舎の完成(2016年)によって人気が高騰し、厳しい入試が続いていたので落ち着きを取り戻したといえます。

表7. 日本大学系の状況

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2019	2018	2017	2016	2019	2018	2017	2016
日本大学第一	124	148	103	68	187	292	215	224
日本大学第二	79	139	105	107	287	439	424	357
日本大学第三	73	82	61	61	150	185	145	145
日本大学櫻丘	236	266	340	305	487	428	572	547
日本大学鶴ヶ丘	234	261	176	261	535	584	403	593
日本大学豊山	262	324	304	261	341	433	594	533
日本大学豊山女子	225	281	169	96	65	91	62	37
計	1,233	1,501	1,258	1,159	2,052	2,452	2,415	2,436
目黒日本大学(日出)	190	(183)	(192)	(198)	526	(414)	(530)	(533)

日本大学豊山女子も推薦、一般入試ともに減少していますが、推薦入試はこの5年間で前年度に次ぐ多い人数です。一般入試も前々年度の応募数に戻った形です。

もうひとつの注目点は、日出が日本大学の準付属となり校名を目黒日本大学と改めたことです。基準も大幅に上げて入試に臨みましたが、日出の時と変わらぬ応募者を集め期待通りの入試になりました。

4. 進学校の入試状況

次に進学校の状況についてみていきましょう。表8では動きのあった進学校を取り上げています。複数のコースがある場合は合計して学校全体の推薦受験者、一般応募者を掲載しています。

表8. 進学校の状況

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2019	2018	2017	2016	2019	2018	2017	2016
朋優学院	135	95	61	49	2,661	1,805	2,073	1,924
駒込	390	402	513	429	634	526	837	836
順天	145	272	243	360	156	249	178	266
東洋	448	350	581	403	835	586	795	798
明法	187	69	88	50	382	101	76	144
豊島学院	128	129	164	188	806	779	1,204	1,080
八王子実践	155	163	125	95	1,594	1,935	2,008	2,414
錦城学園	212	96	140	109	549	280	422	430
大森学園(普)	75	83	67	90	655	745	602	653
岩倉(普)	214	229	179	155	961	838	680	948

進学校では、**朋優学院**の飛躍が続いています。2018年度に「進学」を募集停止しましたが、人気は高まるばかりで「特進」「国公立」とともに応募者は増えました(特進 705→763人、国公立 816→1,042人)。今年度も特進は 457人 59.9%、国公立は 399人 38.3%の増となっています。また、推薦受験者も増加傾向で第一志望者が増えています。この影響なのか、青稜と文教大学附属は応募減となりました。**駒込**も勢いは衰えません。入学生が定員を大幅に超過していることから、2018年度に「アドバンス」を募集停止し、今年度には加点制度を縮小するなどその勢いにブレーキをかけていますが、逆に一般応募者は 108人 20.5%の増となりました。**順天**は推薦、一般入試ともに応募者が増えたり減ったりしています。今年度は推薦、一般入試ともに応募減となりました。これは前年度の2018年度入試で推薦入試の推薦ⅡとⅢ、一般入試それぞれで不合格者が多く出たことや、淑徳巣鴨の「アルティメット」「プレミアム」の内申基準が設定されたことなどが影響したと考えられます。**東洋**は「特選」「特進」の定員を減らして「総合進学」を増やし、さらに「特進」ではB推薦、併願優遇の基準を設定しました。その結果、推薦受験者は44人から136人、一般応募者は49人から260人へと大幅に増加しました。男子校から男女共学に変更した**明法**は推薦合格者だけで172人と、高校募集の定員100人を大幅に超える人気ぶりを示しました。一般入試も101人から382人へと3倍強の応募者を集め共学化初年度として好調なスタートを切りました。**豊島学院**は前年度の2018年度入試で内申基準をアップしたことから応募者が減少、そして今年度は「特進」は淑徳巣鴨「アルティメット」「プレミアム」の影響でさらに減ったものの、「選抜進学」は東京成徳大学「進学選抜」の基準アップの影響なのか応募者が増加し、結果的に前年度並みの受験生を集めました。**八王子実践**は近年急激に伸びてきた学校のひとつです。2018年度は「文理コース」を「文理選抜」と「文理進学」に分けました。「文理選抜」は従来の「文理コース」より1ランク上のクラスです。そして今年度は「特進」と「文理進学」の定員を増やして「普通コース」の定員を削減するなど学力レベルの底上げを図っています。一般入試の応募者は昭和第一学園「総合進学」に流れ

たのか大幅な応募減となりましたが、もっともハイレベルの「J特進」の一般応募者が増加傾向になっています（2017年度より70→90→118人）。来年度は「特進コース」に「特別選抜クラス」を設置する予定です。錦城学園は併願基準を緩和し推薦と揃えました。しかも男女別基準を男女同基準としたため推薦では女子の受験者が2.5倍以上になりました（A推薦：女子33→88人）。一般入試も男女合わせた応募者数が280人から549人へとほぼ倍増しています。その影響でほぼ同じ基準となった正則の応募者が減少しました。大森学園も伸びている学校です。2018年度に「英語コース」を新設し、他コースの名称変更を行った上、「選抜」の基準に9科の選択肢を加えたことから大幅に応募増となりました。今年度は立正大立正、東京、橘学苑などに移動したようで応募数は減少しましたが、「国立」は2017年度より65→73→83人と増加傾向です。岩倉も2014年度の共学化以降躍進しています。2018年度に部活も頑張る「L特」を新設、2019年度は「特進」の定員を倍増し、「S特」と「総進」の基準をアップするなど学力レベルの底上げを図っています。今年度の入試は、基準を上げた「総進」の推薦受験者は前年度並み、一般入試は応募者増と相変わらずの人気ぶりを示しました。

このほか、表はありませんが、男子校では佼成学園が推薦、一般入試ともに応募増になりました。私立併願複数可とし「文理」では加点制度を設けるなどの変更を行いました。一般入試では「難関国公立」の応募者が29人から55人へと大幅に増加しました。京華も「進学」「特進」で推薦、一般入試ともに増加、面倒見の良さと進学実績で高い人気を維持しています。女子校では玉川聖学院が好調です。推薦は2017年度より44→58→70人、一般入試は79→103→136人と増加傾向です。東洋女子が躍進しました。推薦では受験者が58人から176人へ、一般入試では90人から166人へと大幅に増加、年収の1,000万円まで授業料を無償とする「無償化プラン1000」と制服のモデルチェンジの影響と思われます。神田女学園も基準を緩和したり、選択肢を増やしたりするなどの変更があり推薦、一般入試ともに増加しました。蒲田女子も同様で、「キャリア」で基準を緩和したため推薦、一般入試とも応募増です。宝仙学園は「進学」の募集を停止し、「保育」のみの募集として募集人員が半減（65→30人）しましたが、推薦は33人から28人、一般応募者は82人から55人と大きな落ち込みは見られず根強い人気を示しました。

5. まとめ

以上のように、私立志向が高まっているからといってすべての私立高校の応募者が増加しているわけではありません。応募者が増加するにはその理由がありますし、減少する場合も同じです。応募状況に影響を及ぼすことといえば、男女共学化や校舎の新築などの施設設備の整備、制服のモデルチェンジなどが大きな要素になりますが、入試制度の変更も応募者の増減に直接関係します。内申基準を上げれば応募者は減少し、緩和すれば増加します。また3科5科9科の選択肢の変更や加点制度の変更なども関わってきます。さらにコース改編、募集人員の増減、入試日や検査内容の変更も影響します。ただ、都立志向が高いときとは異なり2018年度入試より、これらの変更受験生が敏感に反応するようになってきているようです。それだけ私立高校に流れやすい土壌ができています。次年度以降の私立高入試でもさまざまな変更点によって応募者が増減し変動の激しい入試になることが予想されます。

